

町長

ひとくごと

(39)

斉藤 讓

今年は二月から三月上旬にかけて、異常なほどの天候不順が続いた。野外仕事の農業や工事関係者の人々のご苦労も並大抵のことではなかったかと思いやられる。町の仕事もこの時期は、今年度事業の総仕上げの段階であり、これに新年度予算を中心に審議のはじまる定例議会にむけた準備などが重なって、どこの課も戦場のような忙がしさであった。私も部内協議や各種の会議、議会、卒業式、祝賀会などに混じって葬儀などもあり、今まで休日らしい休日も無く、まるで独楽鼠のように動きまわってきた。そのためか、ついつい朝寝坊をしたり、雨の鬱陶しさも手伝ったりして、日課である犬の散歩も父親に押しつけてしまった。だから今年、いつもこの時期に犬と歩きながら聞いた春の

今年の高校入試は、近年にない素晴らしい成果を挙げた。これも彼等自らの努力と、件の「店屋物先生」に象徴される先生方の情熱が窺ったからであり、燃える中学校の証でもある。この卒業式も、これを裏づけるかのように厳粛でとても感動的であった。そしてまた、うれしい卒業式でもあった。天候不順や多忙とは逆に、私にはうれしいことが続いた。長い間の懸案であった東陽病院の新築工事が、諸問題を解決して先日起工式を行ない、明年五月の完成に向けて本格的に動き出したのである。また、栗山川の改修工事中で進められていた木戸橋の掛替工事が、この度一年の屋形橋に続いて完成し、橋名も「木戸大橋」とかえて、近代的な新橋が誕生した。うれしいことは、更に続く。本年度当町が行なった「ふるさと探訪事業」が、優良施策として県知事表彰を受賞した

のである。県下八十市町村の中から、三市、二町の五団体が選ばれ、その中の一つに入った。このふるさと探訪事業とは、町民の皆さんに光町の地理や歴史を理解していただくという作成配布をした「ふるさと探訪誌」、町内の先生方が、子供達のために自らの手で作った「ひかり町かるた」、社会福祉協議会が、公民館の版画教室の皆さんのご協力をいただいて製作販売した「鬼来迎カレンダー」の三部作の事業である。いまだこの市町村も、「ふる里創生」に血眼になっており、創意工夫をこらした数多い事業の中から、この事業が選ばれた意義は大きく、たいへん有難く思っている。これを励みに、一層頑張らなくてはならない。こんなうれしいことが重なっているのに、私の心はいまひとつ晴れない。心の片隅に、ヒンヤリとした憂いがわだかまっているのである。それは何故か。実は、光町の平成元年度の出生数が、八十九人に激減する

春の憂

水仙などの赤や黄色の花が咲き、まさに春たけなわである。いつものことながら、自然の中で生かされている恩恵を忘れず、身近な自然と語りあう心のゆとりを、日々の生活の中に持たなければならぬと、深く自省している。いつになったら「忙中閑あり」の境地に到達できるのであろうか。ところで、先日光中学校の卒業式が行われ、希望に胸をふくらませた百七十七名の卒業生が巣立っていった。

見込みだというのである。前述したように、今年の中学卒業生が百七十七人・小学校入学児童数が百四十二人であることと比較すれば、近年減少傾向にあるとはいえないものの、その減少の大きさがしれよ、活力のある町づくりを目指す私にとってこの現象は、頭から冷水を浴せられたようなショックである。

一方、六十五歳以上の高齢人口の割合は、今年既に十七パーセントに達した。いま光町は、高齢社会と少子社会が、急速に同時進行しているのだ。これこそが、町のこれからの重大な政策課題でなければならぬ。

このことを語ったら、あるご婦人が、私にこう言った。「町長さんも、子供は娘さん一人だから、このことについてあまり強いことはない。えませんね。」痛烈な一撃であった。